

学生の飲酒に関する意識 — アルコールパッチテストの実施を試みて —

加藤 春子*

はじめに

学生達は、大学に入学と同時に親元を離れて1人での生活を始める者、また自宅から通学している者等生活様式は様々であるが高校生の時とは違い部活やコンパ等で飲む機会が増える。

このような、部活やコンパ等での飲み会で、罰ゲームとして飲ませたり飲ませられたり、また早飲み競争やイッキ飲みが行われことも想像に難くない。学生の飲酒はその場の雰囲気や飲まれ時には生命の危機に瀕する場合もあるので軽視は出来ない。

筆者は、講義の中で学生達がお酒が飲める体質なのか、あるいは飲めない体質なのかアルコールパッチテストを実施して自己の体を知ってもらおう機会を設けている。学生達の中には高校時代にアルコールパッチテストを受けた者もいたが、多くの学生は自己の体質が分からないまま飲酒している者が多かった。学生の内から自己の体質を知っていれば学生生活、そして飲酒の機会が多くなるであろう社会人となった時に役に立つかも知れないと考え実施した。

今回、アルコールパッチテストを実施した学生を対象に飲酒に対する意識調査を行い考

察を加えたので報告する。

I 調査方法

対象者は、介護福祉学科3年生が64人、健康プランニング学科3年生が50人、福祉心理学科保健福祉コース2年生が38人で総数152人。

方法は、調査前に調査内容の趣旨及び成績とは一切関係無い旨を説明して同意を得られた学生に依頼した。

配布数及び回収数は、総配布数は245部、回収数は152部、回収率は62%であった。

調査期間は、平成14年4月15日～4月30日まで。

II 結果

1. 未成年時での飲酒経験

未成年時での飲酒経験は、148名(97.4%)の学生が「有り」との回答であった。性別では、表1に示すように、女子学生が123人(98.4%)、男子学生が25人(92.6%)で女子・男子学生共に9割以上が飲酒の経験があった。

表1 未成年時での飲酒経験

人数(%)

	有り	無し	合計
女子学生	123(98.4)	2(1.6)	125(100)
男子学生	25(92.6)	2(7.4)	27(100)

*北海道浅井学園大学人間福祉学部福祉心理学科

キーワード：飲酒、アルコールハラスメント、アルコールパッチテスト

2. 飲酒のきっかけ

未成年時での飲酒の経験を持つ学生の飲酒のきっかけは、最も多かったのが「興味から」で68人(46.0%)であった。以下、「友人に勧められて」が46人(31.1%)、「親に勧められて」が33人(22.3%)等であった(表2)。

表2 飲酒のきっかけ

	人数 (%)
興味から	68 (46.0)
友人に勧められて	46 (31.1)
親に勧められて	33 (22.3)
家にあったから	17 (11.5)
学校祭の打ち上げで	13 (8.8)
卒業生の送別会で	12 (8.1)
新入生歓迎会で	6 (4.1)
体育祭の打ち上げで	5 (3.4)
その他	16 (10.8)

(複数回答)

3. アルコールパッチテストについて

アルコールパッチテストについて「知っている」と回答した学生は、女子学生が71人(56.8%)、男子学生が8人(29.6%)で、男子学生に比べて女子学生の方が有意に多かった(表3)。

表3 アルコールパッチテストについて

	人数 (%)		
	知っている	知らない	無回答
女子学生	71(56.8)	44(35.2)	10(8.0)
男子学生	8(29.6)	15(55.6)	4(14.8)

$p < 0.05$

4. アルコールパッチテストを知ったきっかけ

アルコールパッチテストを知ったきっかけ

は、回答が得られた学生48人の内最も多かったのが、「高校で習った」で70.8%、次いで「検査を受けた」が35.4%、「雑誌で」が23.0%等であった(図1)。

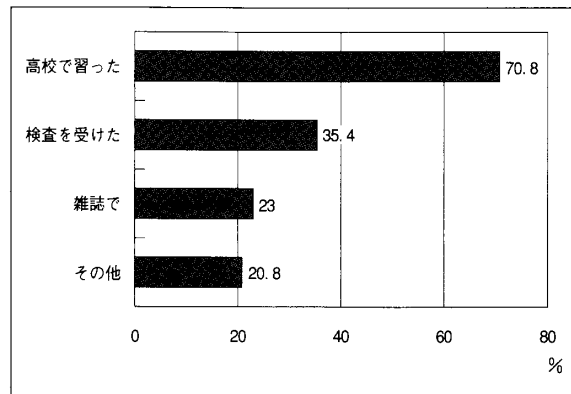


図1 アルコールパッチテストを知ったきっかけ

5. アルコールパッチテストの結果

アルコールパッチテストの結果は、表4に示すように女子学生では「皮膚が赤くなった」と回答した者が31人(27.9%)、「変化なし」が67人(60.4%)、「不鮮明」が13人(11.7%)であった。「変化なし」と回答した者は体内にアセトアルデヒド脱水酵素Ⅱを有しアルコールを分解する酵素を有していることを示している。

一方、男子学生は「皮膚が赤くなった」が9人(42.9%)、「変化なし」が8人(38.1%)、「不鮮明」が4人(19.0%)であったが女子・男子学生間に有意差は認められなかった。

表4 アルコールパッチテストの結果

	人数 (%)			
	皮膚が赤くなった	変化なし	不鮮明	合計
女子学生	31(27.9)	67(60.4)	13(11.7)	111(100)
男子学生	9(42.9)	8(38.1)	4(19.0)	21(100)

6. 皮膚が赤く反応した学生の今後の飲酒に対する意識

アルコールパッチテストの結果皮膚が赤く反応して、体内にアセトアルデヒド脱水酵素Ⅱがないと分かった学生の今後の飲酒に対する意識については（図2）、「付き合い程度に飲む」が最も多く69.4%、以下「飲めないと分かってでも飲む」が22.2%、「なるべく飲まないようにする」が19.4%、「飲む会になるべく参加しない」が8.3%、「飲めないふりをする」が0%、「その他」が5.5%等であった。

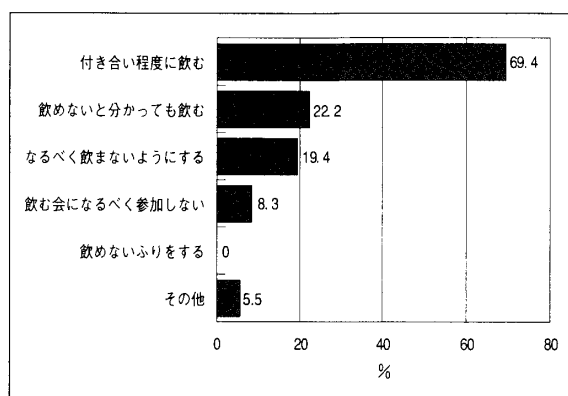


図2 今後どのように気をつけるか

7. アルコールハラスメントについて

アルコールハラスメントと言う言葉を知っているか否かに付いては、女子学生は「知っている」と回答した者は53人（44.9%）で半数を下回った。

男子学生の方は、「知っている」と回答した者は12人（50.0%）で、女子・男子学生間に有意差は認められなかった（表5）。

表5 アルコールハラスメントと言う言葉を知っているか否か

	人数 (%)			
	知っている	知らない	無回答	合計
女子学生	53(44.9)	65(55.1)	0(0.0)	118(100)
男子学生	12(50.0)	11(45.8)	1(4.2)	24(100)

8. アルコールハラスメントを受けたことがあるか

アルコールハラスメントの被害経験の有無に付いて、女子学生は「有り」と回答した者が28人（23.0%）、男子学生は、4人（16.7%）であった。このことから、男子学生にもアルコールハラスメントの被害経験を有する者がいることを示しているが女子・男子学生間に有意差は認められなかった（表6）。

表6 アルコールハラスメントを受けたことがあるか

	人数 (%)		
	有り	無し	合計
女子学生	28(23.0)	94(77.0)	122(100)
男子学生	4(16.7)	20(83.3)	24(100)

9. アルコールハラスメントを受けたのはどのような時か

アルコールハラスメントを受けた時の状況は、最も多かったのが「部活で」が43.8%、「コンパで」が34.4%、「アルバイトで」が21.9%等であった（図3）。

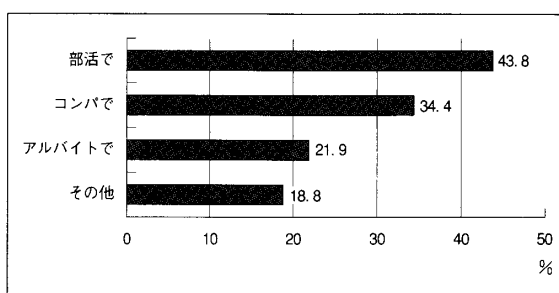


図3 どのような時か

10. 飲酒する機会

3年生での現在、飲酒する機会を図4で示した。最も多かったのが、「友達の所に泊まった時」で73.0%、以下「お正月やお盆の時」が48.2%、「合宿など旅行した時」が41.6%、

「サークルの飲み会」が25.5%等であった。

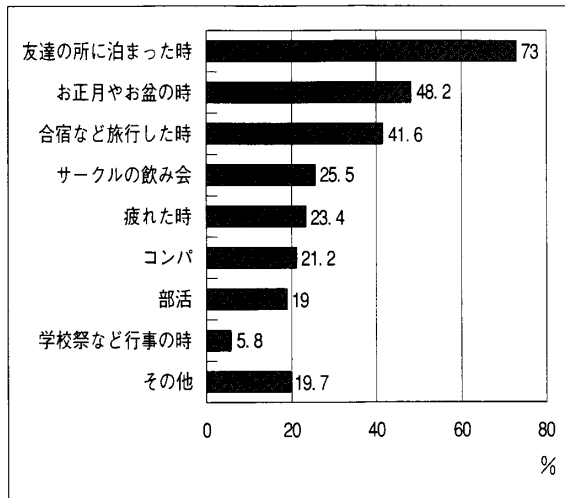


図4 飲酒の機会

11. 生活様式と飲酒について

飲酒する機会を家族と同居しているか、あるいは一人暮らしなのかをしてみると、家族と同居している学生で、「飲酒することが多い」と回答した者は68人(49.3%)、下宿等一人暮らしをしている者は70人(50.7%)であった。

この結果、生活様式別では飲酒行動に有意差は認められないが、下宿等一人暮らしをしている学生の方が飲酒する機会が多い傾向が窺える(表7)。

表7 家族と同居または一人暮らしと飲酒の機会

	人数 (%)	
	家族と同居	一人暮らし
飲酒することが多い	68(49.3)	70(50.7)
飲酒することは少ない	7(58.3)	5(41.7)

III 考 察

アルコールパッチテストの実施方法は、絆創膏に70%エタノールを2~3滴落として、

前腕の内側に貼り、高校生なら7分(成人の場合5分)後にはがして20秒以内に赤くなったら「全く飲めない体質」、7分以内に赤くなったら「かなり弱い体質」、全く反応しない時は「普通に飲める」と判定されるテストである。これは、アルコールパッチを皮膚につけると皮膚にあるカタラーゼによってアルコールが酸化され、アセトアルデヒドが生成する。アルコールパッチテストで皮膚が赤くなるのは、アセトアルデヒド脱水酵素IIの活性が低いか欠損している為にアセトアルデヒドの蓄積で毛細血管が拡張する為である。アセトアルデヒド脱水酵素IIの活性が高い場合はアセトアルデヒドは早く代謝されるので皮膚は赤くならないという検査である。

本調査で初めて飲酒した年齢をみると、最も早い者で12歳、平均は15.5歳であった。厚生労働省の全国調査では¹⁾初めての飲酒年齢は11~12歳が最も多いとの報告がある。本調査の結果と比較しても大差は見られず低年齢から飲酒行動が見られることが示唆される。

アルコールは、肝臓でアセトアルデヒドに分解された後に最終的には水と二酸化炭素になる。先述したように、このアセトアルデヒドを分解する酵素を有するか否かによって飲める体質なのか、あるいは飲めない体質なのか個人差が生じる。未成年の場合、飲酒が習慣になっていないとは言え体自体が未熟で、アセトアルデヒドを分解する能力も未熟な飲酒は身体に有害ばかりではなく、自己の判断に責任が持てない年齢では時には暴走して最悪の場合死に至ることもあるので軽視は出来ない。

今回、未成年時での飲酒経験が「有り」と

の回答は97.4%で、女子・男子学生共に9割以上を占めた。出身高校別にみると、公立が81.5%、私立が18.6%で公立高校の方が飲酒経験が多かった。私立もキリスト教系の高校では21.4%、仏教系が10.7%、宗教的理念が背景にない高校では67.9%であった。このことから、宗教的理念を持つ高校では飲酒経験は少ない傾向がみられる。

未成年時での最初の飲酒のきっかけで最も多かったのが、「興味から」で46.0%、次いで「友人に勧められて」が31.1%、「親に勧められて」が22.3%であった。最初の飲酒のきっかけが「興味から」と言うことは、大人が飲んでいるお酒はどんな味がするのだろうか、ジュースとどう違うのだろうか、美味しいのだろうか等の関心が強く影響を与えているのではないかと推察される。また、その他の回答として友人の誕生会で、クリスマス会で、正月に御神酒を、親戚の集まりで、友人と遊びに行つて何となく飲んだ等があり、行事の時に飲酒のきっかけになっていることが示唆される。

アルコールパッチテストに付いては、「知っている」と回答した学生は、女子学生が56.8%、男子学生が29.6%で男子学生に比べて女子学生の方が有意に多かった。女性は男性に比べてアルコールに対して弱いこと、男性の方は飲めて当たり前の風潮が男子学生の関心の低さに影響を与えているのではないかと考えられる。アルコールパッチテストを知ったきっかけは、「高校で習った」と回答した者が最も多く70.8%、次いで「検査を受けたことがある」が35.4%であった。その他の回答として、中学校の授業で習った、テレビ、雑誌、友達から、実際テストを受けた

友達から話を聞いた等があった。

全般的に、アルコールパッチテストについて知っているとは回答した割には、実際にアルコールパッチテストを受けた学生は少なく先の未成年時で飲酒の経験を持つ学生の内、「全く飲めない体質」と分かった学生が31.3%を占めており自己の体質を知らないまま飲酒していたことを示している。

授業の中で実施したアルコールパッチテストの結果は、「全く飲めない体質」と分かった女子学生は27.9%、男子学生は42.9%を占めた。この結果は、何かと飲酒の機会が多い学生に対する指導の在り方を示唆するものと受け止められる。秋田経済法科大学では、毎年新入生にアルコールパッチテストを実施しており、「全然飲めない族」と判定された学生にはレットカードを、「ホントは飲めない族」と「飲みすぎ注意」と判定された学生にはイエローカードを持たせて飲酒事故の予防に努めている。秋田経済法科大学がこのアルコールパッチテストを始めたのは2000年からで、実施するきっかけになったのは学生が急性アルコール中毒に陥り救急車の出動を要請する事態が生じたからである²⁾。このアルコールパッチテストを取り入れたことで学生本人が自己の体について認識が高まったこと、周囲の学生の理解を促す効果があったこと、また飲めない学生に飲酒を強要しなくなった等の効果が見られたと述べている。

今回実施したアルコールパッチテストの結果で「全く飲めない体質」と分かった学生の自由記述を見てみると、「アルコールは飲めないでその通りだと思った」、「お酒に弱いんだと納得した」、「余り飲み過ぎないように注意しなければと思った」、「飲まない方がいい

いのかなと思った」,「父親が弱いからやっばりと思った」,「お酒は自分には合わないと思った」,「少しガッカリした」,「驚いた」,「何度やっても一緒にガッカリした」,「分かっていたから気にしない」,「自分の体質が分かって良かった」等の記述が多く見られた。このことから、学生は「全く飲めない体質」と分かったことで納得すると同時に自分の体質を素直に受け止めていることが理解出来る。

一方、「飲める」と判定された学生の方は、「自分は飲んで大丈夫と思った」,「自分できちんと考えて飲むべきだと思った」,「適量を飲まなければいけないと思った」,「強くても余り飲まないように注意しようと思った」,「普段からお酒に強かったのでやっぱりと思った」,「自分の限界は知らないが飲めるとは思っていたので納得した」,「酒には強いと思っていたがそれが証明された」,「親にもお酒が強いと言われていたので納得した」等の記述が多く見られた。「飲める」と判定された学生の方は、結果をありのまま受け止めると同時に飲酒に関しては節度ある態度で臨みたいとの意識が垣間見える。

では、このアルコールパッチテストの結果皮膚が赤く反応して、体内にアセトアルデヒド脱水酵素Ⅱを有していないと分かった学生が今後どのような意識で臨むかについては、最も多くを占めたのが、「付き合い程度に飲む」で69.4%、「飲めない体質と分かっても飲む」が22.2%、「なるべく飲まないようにする」が19.4%等であった。その他の回答として、「死なない程度に飲む」,「もともとお酒は好きでないから余り飲まないようにする」等があった。このことから、今後は付き

合い程度には飲むけれど深酒は避けたとの意識が垣間見られる。

次に、アルコールハラスメントについて「知っている」と回答した女子学生は44.9%、男子学生は50.0%で、男子学生の方が女子学生より若干多かった。実際に、アルコールハラスメントの被害経験の有無については、「有り」と回答した女子学生は23.0%、男子学生は16.7%で女子学生の方が多かった。しかし、男子学生にもアルコールハラスメントを受けた経験を有する者がいることが分かる。

アルコールハラスメントを受けた時で最も多くを占めたのが「部活で」が43.8%、「コンパで」が34.4%、「アルバイト先で」が21.9%、その他が18.8%であった。その他として、「先輩の家で」,「友達との飲み会で」,「中学校の先生に会った時」等の回答があった。アルコールハラスメントの内容は、「先輩から一気飲みを強要された」,「バイト先で酔ったおじさんに絡まれた」,「これくらい飲まなきゃ駄目だと言われた」,「一気飲みがルールと強要された」,「暴力的な言葉を言われた」,「これ以上飲むと具合が悪くなりそうなのに先輩に強要された」等があり、この中で一気飲みを強要された者が最も多くを占めていたことから、飲酒の経験が浅く判断が甘い学生はともすれば雰囲気や周囲の思いに流されて一気飲みをしないと限らない状況にさらされていることが窺える。その結果、時には生命に関わる事故が起きるであろうことは想像に難くない。そしてこのようなことは、いつ誰に起きてもおかしくないのである。

札幌市消防局³⁾の、平成14年1月～同年12

月迄の間に急性アルコール中毒で救急車が出動した件数は1,311件である。その内、未成年の出動件数は172件で全体の13.1%を占めている。さらに、20～29歳迄の出動件数は601件で全体の45.8%を占めている。この未成年と、20～29歳を合わせると全体の58.9%を占め実に半数を超えている。救急車の出動件数からも、如何に多くの若い人達が自己をコントロール出来ずに飲酒しているかが推察される。

大学3年生になり、成人になった現在で飲酒している学生は女子学生が91.9%、男子学生が92.3%で女子・男子学生共に9割以上の学生が飲酒している。主に、飲酒する機会は「友達の所に泊まった時」が最も多く73.0%、「お正月やお盆の時」が48.2%、「合宿など旅行した時」が41.6%等であった。その他の回答として、「友達の誕生会」、「休みの前の夜」、「友達が夜遊びに来た時」、「眠れない時」、「気持ちが沈んでいる時」等である。

現在の飲酒行動を、家族と同居しているか、あるいは一人暮らしなのか学生の生活様式との関連で見ると、家族と同居している学生で飲酒している者は49.3%、一人暮らしの学生は50.7%であった。このことから、親元を離れて一人暮らしをいるから飲酒する機会が多いと言う訳ではない。それでは、親は学生が飲酒していることを知っているのだろうか。これについては、全員が「知っている」との回答であった。尚、現在飲酒をしていない学生の内、アルコールパッチテストの結果「全く飲めない体質」と判定された学生が6割弱を占めている。アルコールパッチテストが、学生の飲酒行動に影響を与え飲酒行動に対して自制へと働いていると考えられ

る。

最後に、飲酒についてどのように思うか自由記述したものをまとめて述べたい。「程度により薬になる」、「楽しく飲めるお酒は良いことだと思うが度を越したりアルコールハラスメントが起きる位飲むのは良くない」、「飲み過ぎは危険」、「お酒は基本的に嫌い」、「酔っぱらっている人を見ると情けなく感じる」、「他人に迷惑をかけなければ良い」、「飲酒は個人差があるので相手がいる時には強要しないことが大事である」、「飲めると言って得意げにならない」、「酒は怖い人を変える」、「考えながら飲むようにしたい」、「飲み過ぎや一気飲みなどによって起きる事故には十分気を付けたい」、「お酒を飲む人はマナーを守るべきである」、「飲んだ時は自分に責任を取る」、「余り飲みたくない」、「記憶がなくなるまで飲むのはどうかと思う」、「飲める量を知っておくことは大切である」、「十代で飲酒したことのない人はいないと思う」、「飲んで意識があれば良い」、「お酒は弱いがストレスや疲れを発散出来るように思う」、「たまに飲むと楽しい」、「自分自身を見失ったり他人に迷惑をかけなければ良い」、「愉快的気持ちになれるので良い」、「リフレッシュしたり人間関係をより強め楽しい気持ちにしてくれるので良い」等があった。

これらの内容は実に具体的である。学生自身の身の回りに起きたことや見たこと等の経験に基づいて述べられていると考えられ、少なくとも救急車のお世話になる飲み方だけは避けたいとの意識が読みとれる。

おわりに

我が国で、未成年飲酒禁止法が公布・施行

されたのは大正11年（1929年）である。しかし、未成年の飲酒は、「お酒くらい」と周囲の大人は見て見ぬふりをする傾向が少なからず見受けられる。厚生労働省が2000年に高校生を対象として行った調査では、3年生男子で酔いつぶれるまで飲むが9.1%、女子生徒は3.5%を占めており未成年の飲酒は看過できない様相を呈していると警告している。先日も沖縄で、自宅で友人達と飲酒していた16歳の高校2年生がアパート3階から転落死する事故も報道された。これは、外で飲む位なら自宅で飲んで欲しいとの思いから母親が自宅を提供した結果であるが、このようなことは決して希有なこととは思われない。

今回、本稿を執筆するに当たり市内の某高校の先生に直接会って話を聞いた。その高校では、数年前に生徒の飲酒に絡んで死亡事故が起きた高校である。事故後、表面上生徒の飲酒行動は少なくなったように見えるがそれは単に要領良くなったのか、意識が高まったのか判然としないとのこと。さらに、高校生の飲酒は、飲酒そのものよりも飲酒に絡んだ暴力事件など重大な事故につながりやすいのでその方が心配であると生徒指導の先生は話していた。

さらに、札幌市内の大学数校に電話により話を聞いた。その結果、原則的に学内での飲酒を禁止している大学、または特に禁止はしておらず学生の良識にまかせている大学など様々であった。学生の良識にまかせている大学のうち数校は、急性アルコール中毒で救急車の出動を要請することが年間に数件発生するとのこと、また救急車の出動を要請するほどのことではないが学生の飲酒で生じる小競り合い、喧嘩、もめごとは多々見られるとの

ことであった。

酒類が容易に購入可能な状況、小遣い程度で買える価格、好奇心をそそるパッケージやTVでのコマーシャル等を鑑みると、好奇心の強い時期での飲酒を規制することは難しい側面もある。生徒・学生に対してただ「飲むな」だけの指導では説得力に欠け、その効果も余り期待出来ないのではないだろうか。アルコールパッチテストの実施は、自己の体を知る良い機会にもなり、かつ飲酒での暴走行為の抑止の一助にもなるのではないかと考える。

引用文献

- 1) 厚生労働省：未成年者の喫煙および飲酒行動に関する全国調査，2001，p.6
- 2) 秋田経済法科大学保健室資料：三浦愛子，アルコール判定テストの結果より，2002
- 3) 札幌市消防局：救急車出動，2002

参考文献

- 1) 未成年飲酒禁止法：有斐閣，六法全書，平成14年版
- 2) 北海道新聞：2003年2月26日版

Research on Student Drinking

Haruko KATO

ABSTRACT

The purpose of this study is to analyze student drinking experience. The subjects were 152 students from Asaigakuen University. The questionnaire used in this paper was created by Haruko KATO.

Analysis of the survey results showed that 98.7% of the students have experienced drinking in their teens, which started mostly out of curiosity, followed by temptation by friends and so on. Additionally, 52.0% of students knew about the alcohol-patch test. Most of them learned about the test in high school and others had actually had the test done. After conducting the test, 26% had a positive status, 49.3% had a negative status, and 11.2% were unexplained.

Furthermore, 21.1% had experienced alcohol-harassment, which occurred mainly in after school activities and consisted of "IKKI-NOMI", or chug-a-lug, followed by verbal abuse.

Key words : drinking, alcohol-harassment, alcohol-patch test